

歴史は未来の羅針盤

温故知新

『近江日野の歴史』第二巻「中世編」は、第一章「鎌倉・室町時代の日野」、第二章「日野の社会と文化」、第三章「戦国時代の日野」、第四章「信長・秀吉時代の日野」からなります。役場・公民館等にて一冊四、〇〇〇円で好評発売中です。

今回は、『近江日野の歴史』第二巻「中世編」の第四章「信長・秀吉時代の日野」の内容を紹介いたします。

第一節 蒲生氏と織田政権

定秀時代の蒲生氏は、南近江を支配する六角氏に臣従していました。定秀は「六角氏式目」にも名を連ね、重臣として活躍しましたが、六角氏が織田信長と対立して敗れると、蒲生氏は主人を信長へと変えていったものと考えられます。その際に、蒲生氏の当主は定秀から賢秀へ代わったと考えられ、賢秀が信長の配下として、天下統一のための多くの戦に従軍したことがうかがえます。

しかし、天下統一事業の最中、信長が明智光秀に討たれてしまいます。この時賢秀は、安土城から信長の妻子たちを日野へ避難させ、蒲生氏はその功績により領地を与

えられます。この領地を拝領したのは、それまで当主として活躍した賢秀ではなく嫡子氏郷でした。政変を機に当主となった氏郷は、樂市樂座令を布き、日野城下町の繁栄を図りました。

第二節 蒲生氏と豊臣政権

氏郷は豊臣秀吉のもとで多くの戦功をあげ、小牧・長久手の戦いの後には、その功績により南伊勢を与えられます。これにより、蒲生氏は室町時代以来本拠地としてきた日野を離れ、松ヶ嶋城に入城。その後居城を松坂城へ移し城下町を整備しました。転封をきっかけに、活躍の場を日本全国へと移していくことになった氏郷ですが、

彼は天下統一事業を引き継いだ秀吉に従い、各地を転戦することになります。ついには奥州で最後まで抵抗を続けていた伊達政宗の領地会津を与えられ、東北地方の押



▲蒲生氏郷公銅像

さえとして活躍し、豊臣政権内で第三位の大大名へと成長します。

そのような中、氏郷は四〇歳の若さで亡くなります。蒲生家を継いだのは、わずか一三歳の秀行でした。支柱を失った蒲生家中は大きく揺らぎ、「奥州の押さえに足らず」と判断されて宇都宮への転封を命じられてしまいます。

第三節 蒲生氏と徳川政権

秀吉が亡くなると、関ヶ原の戦いが勃発、政権は徳川家康へと移りました。家康は軍事的要衝である会津の地に、意中の人物の入封を検討し、かつて会津を支配して

いた秀行に白羽の矢が立ちます。秀行は家康の三女をめぐっており、家康とは舅と婿の間柄でありました。秀行は、会津領内の各城郭に家臣を配置して守備に就かせますが、秀行期およびその後家督を継いだ忠郷期ともに、家臣の不和や対立が原因で御家騒動が勃発します。その結果、家内は不安定になり、また、後継者が相次いで夭折したことにより、蒲生家はついに断絶することになりました。

なお、第三節では蒲生家臣団について秀行の会津再支配期と忠郷期に分けて詳細に分析しています。

第四節 伊勢転封後の蒲生氏と日野

さて、日野を離れた蒲生氏ですが、日野との関係が途絶えた訳ではありません。転封先の城下では「日野町」が出現したり、馬見岡綿向神社へは修理費用の援助や寄進が行われるなど、先祖伝来の土地である日野には格別な思い入れがあったことがうかがえます。また、氏郷は「故郷いとなつかしう」と日野を懐かしむ歌を詠んでおり、大成した後も望郷の念を棄てきれなかったのでしょう。